離婚したはずなのに、敏腕弁護士に一途な愛を注がれています

目次

離婚したはずなのに、　5
敏腕弁護士に一途な愛を注がれています　257
番外編　隣人

離婚したはずなのに、
敏腕弁護士に一途な愛を注がれています

第一章　運命

淡いピンクからパープルに移りゆく空。太陽が広大な海に溶けるように沈み、その反対側には柔らかな光を放つ月が浮かんでいる。

「すごく、きれい」

幻想的な景色を眺めながら、ひとりごとのようにつぶやく。それから、となりに座る、私の夫となった彼の肩にそっともたれた。

二年前の九月。私、堂島凛々香と、彼――桑原龍樹は、海外挙式とハネムーンを兼ねてモルディブを訪れていた。憧れの水上ヴィラ。デッキのデイベッドは座り心地が抜群だ。宵の気配が濃くなるにつれ、連なるほかのヴィラの明かりが水面に反射して、キラキラと瞬いている。

サイドテーブルにシャンパングラスを置いた龍樹くんが、私の肩をそっと抱いた。そして、私の顔を覗き込む。

「本当だ。……一緒に撮ろうか」

「うん」

どうやら龍樹くんもこの風景を気に入ったようだ。私がうなずくと、グラスのそばに置いていたスマホを手に取り、内側カメラで自撮りする。

しかし何回チャレンジしても、景色がほとんど入らない。欲張ったけれど、結局、空と海を入れるのが精いっぱいだった。撮った写真を見ながら笑い合う。そんな瞬間さえいとおしい。

「景色よりも、式での凛々香はもっときれいだったよ」

「……珍しいね。普段、そんなこと言わないのに」

スマホをテーブルに戻した龍樹くんが、さらっと感想を述べたから、私は照れながら言った。

どちらかと言えば寡黙で、ポーカーフェイスの彼にしてはやけにストレートな褒め言葉だ。だからこそ、今の一言には破壊力がある。

昨日、ごく近しい親類だけでこぢんまりとした式を挙げた。真っ白なチャペルとエメラルド色の海はまるでつくりもののように美しかったし、ネイビーのタキシードをまとった龍樹くんはいつも以上に素敵で、見とれてしまった。彼も、ウエディングドレス姿の私を見て同じように思ってくれたのだろうか。

「たまには言葉にしたっていいだろ？」

「もちろん。とってもうれしいよ」

彼のホッとしたような微笑みにつられて、私の頬も緩んだ。

モルディブに来てからというもの、式の準備や打ち合わせ、ゲストである親類たちのフォローと忙しく、気の休まる暇がなかった。挙式が終わり一足先に親類たちが帰国したこの時間、ようやく

ハネムーンを満喫できそうだ。
彼とふたりきり、海と静寂に囲まれて贅沢な時間を噛みしめながら、ふうっと息を吐く。
「なんだかまだ信じられない。私たち、夫婦になったんだよね」
「そうだよ。この空と海が証人。裏切ったら罰が当たりそう」
「裏切らないよ。龍樹くんは私の運命の人だもの」
彼が軽口を叩いたので思わず噴き出したけれど、しっかりとうなずく。
「――ただ、桑原凛々香になるんだって思うと、まだ実感がなくて」
勤務先の会社では引き続き旧姓の堂島を名乗るけれど、戸籍上は桑原になる。たかが苗字が変わるだけだけれど、二十五年間使ってきたものだから、私にとっては一大事。ほんの少しの戸惑いと、それを何倍も上回る誇らしさが同居する、味わったことのない気持ちだ。
「きっと、少しずつ慣れていくよ」
「ん……」
肩に回した手に力をこめて、龍樹くんが私を抱き寄せる。そうして、軽く触れるだけのキスをした。柔らかな感触を残し、すぐに彼の唇が遠ざかる。
「凛々香が俺の奥さんになってくれてうれしい」
「私も……龍樹くんが旦那さんになってくれてうれしいよ」
目元をほんの少しだけ隠すような、束感のある前髪から覗く切れ長の目が、私をじっと見つめる。ただでさえ眉目秀麗（びもくしゅうれい）な彼に、こうやって真剣なまなざしを向けられると、否応なしに鼓動が高鳴る。目元だけではなく、スッと通った鼻筋や薄くて形の整った唇も、彼のクールな雰囲気にマッチしていて、いつも惚れ惚れする。
結婚が決まって、友人たちに写真を見せたときの反応は、「こんなカッコいい人とどこで出会えるの!?」だった。ルックスを褒めてもらえるのはうれしいけれど、同じくらい「見た目だけが彼のよさじゃないのに」という、ちょっと悔しい気持ちも湧いた。
龍樹くんは中身だって素晴らしい人だ。落ち着いていて、物ごとを冷静に分析できる力を持っているし、常に穏やか。だから一緒にいて心地いい。異性としてドキドキするのに、気疲れしない男性は彼が初めて。
――こんなに素敵な人が、私の夫になってくれたんだなぁ。
幸福感に満たされていると、龍樹くんが再び私を抱き寄せた。今度は密着するように力強く両腕を背中に回し、またキスをする。
「ふ、ぁ……んんっ……」
シャンパンの味がする彼の舌が、唇を割って入ってくる。私の舌先を捕らえて絡めると、ぞくぞくした感覚が背中を駆け抜け、頭の芯に響く。
「っ、ここだと……その、恥ずかしいから」
自制心も一緒に蕩（とろ）けてしまいそうだったけれど、ここではほかのヴィラの宿泊客の目につくかもしれない。軽く彼の胸を押して訴えると、彼の唇がふっと綻ぶ。
「じゃあ、なかに戻ろうか？」

うなずくと、龍樹くんは私の左手を引いて立ち上がる。そのとき、左手の薬指にはめられた指輪をそっと撫でた。白銀にきらめく、私が龍樹くんのものになった証を。

優しい波音を背に、ふたりで室内へ戻った。

部屋の中央にあるラタンのテーブルには小さな白い花が飾られていて、ほんのりと甘い香りを放っている。

龍樹くんは私を傍らにある天蓋付きのベッドに誘うと、ゆっくりと私の身体を押し倒した。オーガンジーのカーテンが揺れる大きな寝台は、まるで自分がおとぎ話のヒロインになったかのように錯覚させてくれる。

ムーディーな間接照明に照らされて、彼の顔が翳る。そのまま、再び唇を重ねた。口腔を探る舌の動きに翻弄されつつ、夢中になってそれを追いかける。付き合って二年も経つというのに、龍樹くんとキスをするたびに頭が痺れ、胸が甘くときめいて……なにも考えられなくなってしまう。

「凛々香、愛してるよ」

「はぁっ……私も、龍樹くんっ……」

唇を離すと、デイベッドにいたときとは違う、熱を孕んだ瞳が私を見下ろしていた。淡い期待と興奮で呼気を乱しながら、彼の名前を呼ぶ。

「これから、やっとふたりの時間だ」

「あっ……」

龍樹くんがワンピースの上から脇腹を撫でる。腰を経由して、太股に触れられると、くすぐったさとじれったさで、小さく震えた。

青い海に映えそうだと思ったから、いかにもリゾート向きな、Aラインの白いドレスワンピースを選んで持ってきた。普段の生活では汚れることを恐れてこういう服を買うことはないのだけど、一生に一度のハネムーンだから、龍樹くんにかわいいと思ってもらえる自分でいたかったのだ。

肩紐やフロントのボタンが外されて、脱がされていく。ワンピースに揃えた白色のブラの上から、彼が膨らみを包み込むように触れてくる。

「んんっ、ふぅっ……龍樹くんっ……」

「凛々香のドキドキが伝わってくる」

堪らず声を上げると、彼はいたずらっぽく言いながら、膨らみを覆った手のひらをやわやわと揉みしだく。それから、ブラのカップ越しに頂を挟み、ゆっくりと円を描きながら愛撫する。生地越しに熱い指先の感触が伝わって、呼吸が浅く、鼓動は速くなっていく。

「だって……そんな風に触るからっ……」

「こうされるのが好きだよね？」

きゅっと頂を摘まれると、それまでよりも強い快感が下腹部に響く。

「あうぅ……」

小さな喘ぎが唇からこぼれる。満足そうにそれを聞きながら、龍樹くんはしばらくの間、布地を一枚隔てたじれったい愛撫を繰り返した。

――気持ちいい。もっとしてほしい。

心のなかでつぶやいたのと同時に、思わせぶりな指先はカップの下へ滑り込んで、頂に直に触れた。

「っやぁ、それだめぇ……」

乾いた皮膚が優しく擦れて、じわじわとした悦びに変わる。縋るように言うと、龍樹くんは頂を捏ねながらふっと微笑んだ。

「凛々香のことは、誰よりもよくわかってるつもりだよ。どういう風に触れれば乱れてくれるのか、とかね」

「……いじわるっ……んんっ……」

淡い愉悦に耐えながら小さく呻いた。

悔しいけれど反論できない。身体を重ねるたびに、龍樹くんに溺れていったのは事実だ。

まるで、私の身体を知り尽くしているとばかりに、彼の愛撫はいつも的確で、私の思考能力や理性をいとも簡単に奪っていく。きっとこれからもそう。

「はぁっ――はぁっ……」

気が付くとブラを剝ぎ取られ、ショーツを残すのみとなっていた。膨らみから脇腹をフェザータッチで撫でたあと、手のひらが次第に下腹部に向かって降りていく。

「もう、こんなになってる」

下着越しに恥丘を往復したあと、秘裂に指を這わせる。クロッチの部分は、すでに熱い蜜をたっぷりと吸い込んでいた。気づいた龍樹くんが、愛撫の手は止めずに煽ってくる。

「だって……久しぶりだから」

まだ決定的な刺激を受ける前なのに過剰に反応しすぎ、という自覚はあった。羞恥で顔が熱くなるのを感じながらぽつりとつぶやく。

「ごめん。仕事ばっかりで、全然会えなくて」

すると、彼がすまなそうに眉を下げた。もしかしたら、言外に「寂しかった」と不満をぶつけられたように思ったのかもしれない。そういう意図はなかったから、慌ててかぶりを振る。

「ううん。龍樹くんが忙しいのはわかってるから。……私こそごめんね。私のために調整してくれたんだもんね」

式までの二週間、弁護士の龍樹くんは多忙を極めていた。言わずもがな、挙式とハネムーンのための時間を確保するためだ。国内挙式にしていれば、彼にもそこまで負担をかけなくて済んだのだろうけれど、海外挙式は彼と出会う前からぼんやりと思い描いていた夢であり、雑談のなかでも何度か話題にしたことがあった。それを覚えていてくれたらしく、むしろ彼のほうから「海外にしよう」と提案してくれたのだ。

ありがたいけど申し訳ない。きっと、私は少し頼りない表情をしてたのだろう。龍樹くんは瞳を細めて、安心させるように笑う。

「謝ることないだろ。好きな人の夢なら、叶えたいと思うのが普通じゃない？」

「……やっぱり今日の龍樹くん、いつもと違う」

また、どきんと心臓が跳ねる。どちらかと言えば態度で示してくれるタイプの彼が、こんなにはっ

きりと言葉で表現してくれるとは、やはり意外だ。
照れ隠しで口を尖らせて言うと、彼はおかしそうに首をかしげる。
「いや？」
「いやじゃない。……大好き」
込み上げてくる温かい気持ちをそのまま言葉にする。
それを聞いた彼が、うれしそうに破顔した。私の頬にそっとキスを落とし、愛蜜に濡れたクロッチをくすぐるように何度も撫でる。
「んんっ――あぁっ……！」
それを合図に、私の身体が再び熱を持ちはじめた。私の意思とは関係なく、お腹の奥から劣情の滴りが溢れた。きっと、クロッチの染みを大きくしているに違いない。
「もうぐしょぐしょだよ」
下着の意味をなさない。そう言いたげに笑い、龍樹くんはショーツに手をかけて取り払ってしまった。熱い滴りを指先にまとわせながら、剝き出しになった秘裂をまさぐる。
「ぁあああっ……！」
激しい悦びが背中を駆け抜けていく。無意識に両脚を閉じようとしてしまうのを彼が制した。
指先はなにかを探すように潤んだ粘膜の縁を這い回り、やがて敏感な突起を探り当てた。
「そこ、だめぇっ……！」
「かわいい声。もっと聞かせてほしい」

高ぶっているせいか、彼は少し掠れた声でささやいた。秘芽を何度か弾いたあと、ぐずぐずになっている入り口に、中指をゆっくりと沈めていく。
「ふぁあああっ……！」
少しの抵抗もなく、根元までを受け入れる。愛撫する必要なんてないくらい、すっかり解れていた。龍樹くんもそのことに気づいたのだろう。すぐに二本、三本と指を増やして、隘路を広げていく。
何度か抽送したあと、「凛々香」と私の名前を呼び、鼻先がつきそうな距離でこう訊ねる。
「凛々香がほしくて堪らない。このまま、俺にちょうだい？」
問いかけの体を取っているけれど、彼の瞳の奥に強い衝動が潜んでいるのを見逃さなかった。
私は迷わずうなずいた。私もまた、今すぐに彼に奪われたかったから。
黒地のシンプルなTシャツを脱ぐと、無駄のない引き締まった体躯が露わになる。
学生時代から運動は好きだったようで、今も忙しい合間を縫ってジムに通っていると聞く。鍛えるというよりは、身体を動かす機会を得ているという感覚らしい。一日座りっぱなしという日も珍しくないようだ。
細身のシルエットからは想像しにくい厚い胸板や、うっすらと浮き出た腹筋を目にしただけで、これから彼に抱かれるのだと胸が高鳴る。
龍樹くんはハーフパンツと下着を脱ぎ、私と同じように一糸まとわぬ姿になった。彼に再び組み敷かれて、額にキスを落とされる。
「好きだよ」

「ふぁあっ……」
そして両脚を大きく割り開かれ、圧し掛かるみたいにして彼が私のなかに入ってくる。
苦痛や圧迫感はまったくない。それどころか、龍樹くんに身体のなかのあらゆる隙間を埋めてもらっているような安心感さえある。
やがて、彼の切っ先が最奥まで到着する。抱き合う体勢で、下腹部だけではなく全身を密着させていると、胸がきゅうっと切なくなる。
――今、いちばん深いところで龍樹くんとつながりあっているんだ。……大好きな人と。
「私、幸せすぎて怖い」
「どうして？」
つい吐露してしまった不安を、彼が聞き逃すはずはない。私の瞳を心配そうに覗き込んで、彼が訊ねる。
「こんなに幸せすぎたら、あとは落ちていくだけって思っちゃう。だから、怖いの。これ以上の幸せを、味わえる気がしないから」
愛する人と家庭を築けるのは、なににも代えがたいよろこびだ。結婚を機に、お互いの家族との絆も深まった。仕事だってやりがいがあり順調だし、会社での人間関係も円滑に回っている。
こんな風にすべてが上手くいくのは、あまりにも都合がよすぎる気がして……いつか思わぬしっぺ返しを喰らうのではという不安が、頭をよぎるのだ。
「大丈夫。怖がる必要なんてないよ」

そんな私に優しく言い聞かせるみたいに、龍樹くんが言う。
「ずっと幸せでいればいい。凛々香のことは、俺が一生守る」
「龍樹くん……」
最愛の彼の言葉は、それだけで私を納得させてくれる。
――憂うことはない。彼がそう言ってくれているのだから信じよう。きっと大丈夫だ。
「ずっと一緒だよ、凛々香」
「んっ、はぁっ――」
甘いささやきとともに律動が始まる。私は艶めかしい吐息をこぼしながら、下肢を貫く愉悦に浸り、彼のリズムに同調する。
そう、これからはずっと一緒。この広大な空と海に誓いを立て、夫婦になったのだから。
多幸感のなか、私たちは砂糖菓子のように甘いひとときに溺れていった。

◆◇◆

「離婚してくれないか」
「えっ？」
聞き間違いだと思って、つい半笑いで訊ねる。しかしダイニングテーブルを挟んで向こう側に座っている彼は、まったく同じトーンで、まったく同じ言葉を紡いだ。

挙式からちょうど一年。結婚記念日だった。

自宅でささやかなお祝いをするため、腕によりをかけた。コブサラダにローストビーフ、エビのビスク、チキンと野菜のパエリアなど。料理はもともとすごく得意というわけではなかったけど、彼と結婚してほとんどの家事を担うようになってからは、自然と好きになったし、上達したという自負があった。

大切な日だからと、奮発して買った赤ワインを開けようとしたところで、真面目な顔をした龍樹くんが思いもよらない台詞を吐いた。

「……」

あまりのショックにしばらく口が利けなくなった。脳裏で、私の知らない『リコン』の意味があるのでは、なんてことも考えたけれど、そんなはずもない。

「……本気なの？」

龍樹くんがこんな、笑えない冗談を言うはずがないとわかりきっているけれど、確かめずにはいられなかった。静かなうなずきを受けて、背中がヒヤリと冷たくなる。

「私たち、上手くやっていると思ってた。理由を教えて」

心臓がバクバクして、ワインボトルを持つ手が震える。テーブルにワインを置き、私も自分の席に腰を下ろしてから、震える声で訊ねた。

その直後、私を見つめる彼の目が伏せられる。しかしすぐに、まっすぐにこちらを見つめ返して、口を開いた。

「……好きな人ができた」

「なに、それ」

彼の心のなかには、私ではない、別の女性がいる。信じたくない気持ちで、思わずかぶりを振る。なにかの間違いであってほしいと願う一方で、仕事柄、業務や付き合いで帰りが遅い日の多い彼は、私の知らないところでほかの女性と接点を持つことも可能だから、ありえない話でもないのかも、とも思う。

「ひどいことを言っているのはわかっている。でも、うそはつけない。別れてほしい」

「付き合ってるの？　その人と」

次の問いには、緩く首を横に振った。

「じゃあ別れる必要なんてないじゃない」

どん底に落ちた気持ちに光が差したように感じて、私は早口になって言った。

利那的な関係だったのか、相手にも家庭があったのかはわからないけれど、彼らの仲が今後発展しないのであれば、私もなにも聞かなかったことにできる。

というか、聞かなかったことにしたかった。まだ私は、龍樹くんと別れる決断を下せそうにない。

「ほかの女性に惹かれている以上、凛々香と一緒にはいられない」

ところが、彼のほうは違った。たとえ不確かな関係であっても、私ではなく相手を選びたいのだろう。きっと、龍樹くんが今いちばん愛しいと思っているのは、その女性なのだ。

「私に気持ちが戻る可能性はないってこと？」

「……そうだな」

少しだけ眉根を寄せて、苦しそうな表情を見せたけれど、彼はすんなりとうなずいた。

暗闇にひとりで放り出されたような心地がした。その一言で、彼の心は取り戻せないと、はっきりわかってしまったからだ。

龍樹くんは一度決めたことは曲げない性格だ。信念を持ち、自分の意志を貫く姿勢が素敵で、好きだと感じていたけれど、このときばかりは恨めしかった。

――終わってしまう。愛する彼と夫婦でいられる日々が。

「……いやだよ。別れたくない。ねぇ、どうしたらいい？　どうしたら元に戻れるの？」

弾かれたように椅子から立ち上がり、感情的に訴える。

ここで「それなら仕方ないね」って受け入れるのが、分別のあるいい女なのかもしれない。でも、この残酷な現状を初めて知った私には、到底できそうになかった。

「『一生守る』って言ってくれたじゃない。あの約束はなんだったの？　……まだたったの一年だよ。それをもう破るっていうの？」

「……本当に、申し訳ない」

彼を責めても仕方がないのはわかっていたけど、そうせずにはいられなかった。彼はゆっくりと目を閉じて、深々と頭を下げる。

「私は……ずっと龍樹くんだけを見てたのに。龍樹くんは違ったんだね」

付き合っていた期間も含めて、彼と三年過ごした。その間、私の想いはずっと龍樹くんから動かなかったし、これからも離れることはないと確信していたのに――彼は、そうじゃなかった。

龍樹くんは「申し訳ない」と繰り返すだけだった。会話が途切れて、重い沈黙が流れた。

テーブルの上に並べられた料理が、手を付けられることなく冷えていく。今夜はこれらの感想を聞きながら、楽しかった一年間に想いを馳せる予定だった。でももう、そんな未来はどこにもない。

最後の晩餐となってしまった夜から日を置かず、私たちは別々の道を歩き出すために話し合いを始めた。

◆◇◆

離婚から一年後――現在。

戸籍上も堂島に戻った私は、大好きな仕事に打ち込む日々を送っていた。

東和（とうわ）エレクトロニクス株式会社、通称「東和」は日本を代表する大手家電メーカー。私は新卒からずっと、その広報部に在籍している。

広報の業務内容は多岐にわたり、キャンペーンの運用やその社内対応、メディア対応、ＳＮＳモニタリングなどなど。一日中ＰＣに張り付いている日もあれば、取材対応やイベントで出ずっぱりなこともある。今はちょうど新商品のキャンペーンを開始する時期なので、それにかかりきりだ。

九月だというのに、まだ夏の名残が肌にまとわりつく。午前中の業務を終え、昼休みになった。

「お疲れ、堂島」

都心の一等地に位置する、自社ビル内の社員食堂。その一角にある丸テーブルで手早くランチを済ませてひと息ついていると、頭の上から聞き覚えのある声が降ってきた。
「久瀬くん。今休憩？」
「ああ。ここいいか？」
「もちろん」
同じテーブルを指さした彼にうなずくと、彼は手にしていたトレーを置いて、私の正面の椅子を引いて腰を下ろした。
久瀬勇人。営業部に籍を置く同期だ。部署こそ別だけど、彼とはなんとなく馬が合うし、同じ主任というポジションで共感できることも多い。タイミングが重なれば、こうして昼食を一緒にとることもある。
彼のチョイスは唐揚げ丼だ。普段から、早く食べられるからとの理由で丼ものを選んでいることが多い。ボリューミーかつハイカロリーなメニューとは裏腹に、やせ型のすらりとした体躯を維持しているのはすごいなと感心する。
空になった自分の皿に視線を投げた。私が選んだのは、チキンサラダプレートというローストチキンののったサラダと小ぶりのパン、コンソメスープのセット。本音を言えば、お腹が空いていたのでしっかりめに食べたかった。けれど、午後もやることが満載なので、眠くならないように少し軽めにしておいたのだ。
「ちょうどよかった。これ、今日の『ＬＵＸＥキャンペーン』の数字」

私は脇に置いていた社内用のスマホを操作すると、久瀬くんに向けて差し出した。彼はそれを受け取り、画面を覗き込む。
今秋、東和は『日常にホテルライクな余白を』を掲げたラグジュアリー家電ライン『ＬＵＸＥ』を発売する。生活感を抑えたデザインと、家事を軽くする機能性が売りだ。
そのメインとなるのが、『ＬＵＸＥ ＫＩＴＣＨＥＮ』とカテゴライズされたキッチン家電で、卓上食洗機やスチームオーブン、全自動コーヒーメーカーなどが揃っている。
それらの販促のために打たれた企画が『ＬＵＸＥラインキャンペーン』だ。対象商品を購入したレシートをＷＥＢで登録すると、抽選で『ＬＵＸＥ』ラインの家電やギフト券などが当たる。今日の午前までのデータによれば、応募数は想定よりもかなり上振れていた。いい滑り出しだ。
「めちゃくちゃ順調じゃん」
「でしょ。ネットニュースでもけっこう取り上げてもらってるよ」
「コンセプトやデザインがニーズに合ってるんだろうな。テレビや雑誌の取材依頼も多いんだろ？」
私がうなずくと、彼は「ありがとう」と言い添えてスマホを返してくれた。
昨今、共働きも増えた。ゆえに、経済的にゆとりのある家庭では、時間をお金で買いたいと思うものだ。『ＬＵＸＥ』ラインは、そういった暮らしの質を上げたいと願う層をターゲットにしている。発売前からこれほど注目してもらえるのは、『ＬＵＸＥ』の方向性が時代に合っている証拠だろう。
「爆売れの予感だな」
「お互い忙しくなりそうだね。気合い入れないと」

スマホを元の場所に置き、私は自分に言い聞かせるようにして言った。
『ＬＵＸＥラインキャンペーン』は、ギフト券も含めて一万人もの当選者が出る予定の、一大イベントだ。その数値集計や問い合わせ対応については、キャンペーン運用の連携窓口である私が中心になって行うことになっている。
反響が大きければ大きいほど、やることは増える。加えて、今週末には福岡の博多で『ＬＵＸＥＫＩＴＣＨＥＮ』の体験イベントも予定されているから、なおさら頑張らなければ。
「……なに、じっと見て」
ふと、久瀬くんがこちらを見つめていることに気づいた。指摘すると、彼は「ははっ」と笑った。
「――いや、元気そうでなによりだな、と」
ぽつりとつぶやくように言ったあと、久瀬くんは両手を合わせて食事を始めた。口元に運ばれていくおいしそうな唐揚げに視線を注ぎつつ、彼の言わんとしていることを理解して笑顔を作る。
「……いつまでも引きずってられないし。もう、事故にでも遭ったものだと思って割り切ってるよ」
「さすが堂島。たくましいね」
「それはどうも」
軽口に、笑ったまま投げやりなお礼を返す。
会社では旧姓を使用していたので、私の離婚を知るのは手続き関係の部署や直属の上司、そして日頃から交流のある同期のみ。それ以外にも勘付いている社員はいるかもしれないけれど、あえて訊いてはこないものだ。

久瀬くんには、もうひとり仲のいい別の同期とともに何回か飲みに連れていってもらい、慰めてもらった。ふたりがいなかったら、こんなにすぐには立ち直れなかったかもしれないから、深く感謝している。
「元旦那は弁護士だっけ。当然、ぶん取れるものはぶん取ってやったんだろ？」
いかに傷つけられたとしても、龍樹くんの悪口を言うのは気が引けて、彼のざっくりした情報と経緯しか伝えていない。
私は首を横に振った。
「え、まじで？　相手有責の離婚だったんじゃないのか？」
「うん。でも慰謝料を受けとると、私の気持ちをお金で処理されちゃうような気がして、それがいやで」
「もったいない」
「結婚生活はたった一年間だったけど、幸せな気持ちにはさせてもらえたからね。そういう感謝もあったから、いいかなって」
「……まぁ、堂島らしいといえば、らしいけど」
そうは言いつつ、箸を止めた久瀬くんの表情は不満げだ。私も彼の立場なら同じような感想を持つだろう。
地獄のような最後の晩餐から二週間後、私たちは離婚届を提出した。
できることなら別れたくなかったし、もう少し時間を置いて慎重に考えるべきだとも思った。け

れど、やはり龍樹くんの意思が覆ることはなさそうだったので、素直に従った。夫婦関係は妻である自分と、夫である龍樹くんのふたりで成り立つもの。彼がもう夫婦でいられないと言うなら、そうするしかない。

慰謝料として然るべき金額を支払うと申し出てくれたけれど、断固として拒否した。正社員として仕事を続けていたのである程度の蓄えはあったし、それを受け取ってしまったら、私が納得して別れたような形になってしまう。それだけは受け入れがたかった。

離婚には応じたけれど、決して納得はしていない。こんなひどい仕打ちを受けても、龍樹くんへの想いが消えることはなかった。挙式のときと同じ——いや、もしかしたら時を重ねた分、より深い愛情を抱いていたかもしれない。

そしてそれは、今も変わっていない。……とは、情けなくて久瀬くんには言えないけれど。

「再婚とか、考えないのか？」

「うーん、しばらくはいいかな。離婚も結婚も手続きが面倒くさいんだよ。戸籍やカード類の名前の変更とか、引っ越しとか」

一度結婚生活を味わった身としては、ひとりの気楽さもいいけれど、ふたりの心強さが恋しくなることもある。相手がいれば再婚もありかなと思わなくもないけど、今すぐにはそのエネルギーを捻出できない。離婚後は、必要に駆られて事務手続きをこなせたものの、プライベートな時間を削っての作業は実に煩わしかった。当分はこのままでいい。

それに——

「なにより、今は仕事が楽しいから、集中して頑張ろうって感じ」

周囲のあらゆる存在が、離婚による傷心を癒してくれた。両親、友人、同僚、おいしい食事やお酒に、映画やドラマ、小説。ほかにもたくさん。

でも、どん底に沈み込む私の手を力強く引っ張り上げてくれたのは、大好きな仕事だった。会社で自分の業務をこなしているときだけは、なにもかもを忘れて没頭できた。そうして少しずつ、離婚のことを考える時間が減っていき、胸が苦しくなるのも少なくなった。

つらいときに仕事に救われたからこそ、もっと打ち込みたいと思っているのだ。

「堂島って、昔から仕事人間だもんな」

「久瀬くんこそ、彼女がいるって話聞いたことないけど、結婚したいとか思わないの？」

離婚を振り返っていると、どうしても龍樹くんの顔が頭をちらつく。胸の痛みに気づかないふりをしながら、話を彼に振った。そういえば、励ましてもらってばかりで、彼の恋愛事情について訊ねたことはなかったかもしれない。

同期ではいちばん仕事ができるし、ルックスも爽やかで、後輩の女性社員が名指しで彼を「カッコいい」と話しているのを聞いたことがある。その気になれば、相手は見つかりそうなものだ。

久瀬くんはちょっと考えるような間のあと、困ったように笑う。

「そりゃ、そろそろいい歳だし、一度くらいはしてみたいって思ってるよ。でも、相手が必要だろ」

「いい人が見つかったら教えてよ。先輩の私がアドバイスしてあげるから。……あ、でも失敗してるから参考にならないか」

「笑いづらいな、自虐ネタ」
「むしろ笑って。そのつもりで言ってるんだから」
笑い飛ばすと、彼は「仕方ないな」とでも言いたげに静かに笑った。
龍樹くんを完全に忘れたと言ったらうそになる。時折思い出しては、ふと「なにかの間違いでもう一度プロポーズされないかな」とか、ありえない妄想をしてしまうし、もし世界中の誰かを選んで結婚できる権利が得られるとしても、龍樹くんを指名してしまうだろう。
とはいえ、そんな奇跡が起きないこともちゃんとわかっている。時間をかけて龍樹くんを忘れようとしているところだ。彼とは添い遂げるつもりだったから、簡単にはいかないかもしれないけれど……それでも、時が経てば、彼の顔や声を少しずつ思い出せなくなっていくはず。そうして、彼の記憶が私のなかから薄れれば、自然に忘れられるだろう。
焦る必要はない。次の恋については、私がしたいと思ったときに考えればいいのだ。
「……なぁ、堂島。お前さえよければ、今度」
久瀬くんがなぜか深刻な顔でなにかを切り出したとき、傍らのスマホが鳴った。
「あっ、ごめん。電話。……はい、堂島です」
顔の前で片手を拝むようなしぐさをしてから、電話に出る。
「……はい、はい。えっ、今からミーティングですか？　わかりました、すぐ戻ります」
広報部の上司からだ。なんでも、部内で急遽共有する内容ができたらしい。その招集の連絡だった。こういうことは珍しいので、妙な胸騒ぎがする。

「久瀬くんごめん。ちょっとこれからミーティングになっちゃった。……あっ、さっきなにか言いかけてたよね？」
席を立ち、自分の分のトレーを持ったところで、話の途中だったことを思い出す。
「いや、いいんだ。今すぐって話じゃないから。また今度」
「……？　そう？　わかった。じゃ、改めて」
久瀬くんがひらりと手を振ったので、私はうなずいて空いているほうの手を振り返した。そのあと、トレーを配膳口に置いてから食堂を出た。

リラックスした雰囲気の社員食堂とは対照的に、広報部の社員が集められた大会議室の空気は重く、張りつめていた。
壁際のモニターには、某ＳＮＳのスクリーンショットと思しき黒い文字のかたまりが映し出されている。
「これが今朝から拡散されている投稿です。ご覧の通り、投稿者は『ＬＵＸＥ』ラインのキャンペーン制作にかかわった下請け会社の元社員を名乗っています」
河原木（かわらぎ）部長がそう言ったあと、投稿内容を読み上げる。
『【告発】東和の＃ＬＵＸＥ　キャンペーン制作にかかわった下請けの元社員です
ＬＰにしても応募フォームにしても開始直前まで修正が何度も入り夜間対応もありました
なのに追加工数として請求した費用は「契約範囲内です」の一言で削られて終わり

これ下請けいじめじゃないですか？　きれいな広告の裏で現場は疲弊してます』

会議室内にさらなる緊張が走る。私も、背筋がスッと冷えていくのを感じた。

『ＬＵＸＥ』ラインのキャンペーン制作は、東和の下請け会社であるマキシム・クリエイトというＷＥＢ制作会社が担っている。つまりこの投稿は、マキシムの社員が行ったものだろう。

……いや、『元』との記述があるから、投稿者本人はマキシムを離れているのかもしれない。

まだ投稿から数時間しか経っていないのに、かなりの拡散や引用が行われているようだ。コメント欄も多くの反応が寄せられている。その大多数が東和を非難するものだった。

無理もない。この投稿文だけを読めば、東和が下請け会社に対してまさに『いじめ』をしているように受け取れる。

「……これ、ニュースになる可能性ありますよね」

私の直属の上司である杉田課長が発言すると、河原木部長は微かにうなずいてから全体を見渡し、再び口を開く。

「まず、事実確認が必要です。堂島主任は、キャンペーン運用の連携窓口でしたよね」

河原木部長の視線が、私に向けられた。

「は、はい」

「ほかにも仕事を抱えているところ負担をかけますが、今回の件、経緯を追ってもらえませんか？」

「承知しました。整理します」

「よろしくお願いします」

私がうなずくと、河原木部長はそう言って、また全体に視線を向ける。

「それがはっきりするまでは、各所からの問い合わせには『確認中です』という回答で統一してください。対応時の返答がバラバラですと、疑念を煽ることになります」

私たちは口々に「はい」と答えた。こういう場合、最初の対応でつまずくとその後も不信感を抱かれてしまうので、注意を払わなければいけない。部長が続ける。

「――それから、こちら側でも派生の投稿がないか監視するつもりです。状況が変わったら即共有してください。以上です」

自分のデスクに戻った私は、まず管理部に連絡を入れた。

マキシムに限らず、支払いの決裁や査定は管理部が行っているため、管理部とマキシムの間でのやり取りを確認する必要があったからだ。

管理部の返答は淡々としていた。マキシムから追加請求が提出されていたのは事実。しかし、社内規程と契約書を踏まえた結果、追加の作業は契約範囲内として査定――つまり、追加の請求には応じなかったという。マキシムに送った回答メールも残っており、必要なら共有できるとのことだった。

ＳＮＳの投稿内容は本当だった……？

次いで、販売促進部に連絡した。キャンペーン制作の追加修正の依頼に関して経緯を確認すると、キャンペーン開始直前に修正が集中した理由が見えてきた。応募条件の文言や当選通知の注意書き

など、法務部や管理部からの指摘を受け、整合を取るために差し替えが続いたのだという。
担当者は「軽微な修正の範囲だと思っていた」と言った。実際、マキシムからは追加請求が上がっても、管理部は「契約範囲内」として追加支払いを認めていない。
マキシム側は契約以上の修正を重ねたつもりだが、東和側は契約内の軽微な修正として片付けてしまった。
この食い違いが、『下請けいじめ』という言葉に変換され、独り歩きしているというわけだ。
事実関係が概ね明らかになったので、私は速やかに内容をまとめて杉田課長に報告をした。それから、河原木部長への報告に同行する。
事情を把握した河原木部長から、今後の方針を伝えられた。
現状では、外に向けて公式な声明を出さない。ある程度事実が見えたのなら公表すればいいと思いがちだけれど、企業としての発言は、一度出したら引っ込められない。しかも契約の話は言葉の端を突かれやすく、少しでもブレればうそだと叩かれてしまう。法務部の確認が揃う前に口を開くのは、こちらから燃料を投下するようなものなのだ。
代わりに、問い合わせ対応の言葉を揃える。時系列を確定と未確定に分け、想定問答やテンプレートを今日中に固める。さらに、ＳＮＳなどで社員個人が勝手に発信しないよう、社内にも注意を回す――など、部長の指示はそこまで一息に続いた。
席に戻り、すぐ問い合わせへのテンプレ作成に取りかかる。キーを叩いていると、近くの席の同僚たちの会話が耳に入ってきた。

「例の投稿、引用めちゃくちゃ増えてない？」
「すごい勢いだよね。さっき、課長がさっそくメールの問い合わせ対応してたよ」
すでに問い合わせが来ているなら悠長に構えてはいられない。速やかにテンプレを完成させなければ。
手の空いている同僚にも協力してもらい、テンプレ案をまとめたころには、終業時間をとっくに過ぎて夜になっていた。あっと言う間で、時間の感覚がない。
完成した案のデータを課長に送り、伸びをしたついでに周りを見回してみる。同僚たちはすでに退勤しているようだった。
「お疲れ、堂島」
そこへ、部署ごとの仕切りに使っているパーテーションから、片手に小さな紙袋を提げた久瀬くんが顔を出す。
「久瀬くん。まだ残ってたんだ」
お昼に顔を合わせたばかりなのに、久しぶりに会ったような感じがするのが不思議だ。彼はうなずきながらそばにやってきて、私のとなりの席の椅子に座り、こちら側を向いた。それから、声のトーンを抑えて切り出す。
「大変だったんだろ。ＳＮＳの件」
「やっぱり知ってるんだ」
「お客さんから聞かれてさ。あ、もちろん、余計なことは言ってないけど」

自身の唇のうえで人差し指を立てる久瀬くん。部長への報告を終えたあと、課長が社内向けに当該の件についての発信を禁止する旨の通知文を出していたから、彼も方針を理解しているはずだ。
「もう、午後は大変だったよ。自分の仕事後回しにして、各部署に確認入れて、課長や部長に報告してから想定問答作って……それがやっと終わったところ」
「じゃ、一息入れれば？　腹も減ってるだろ」
彼はそう言いながら、デスクに向き直り手にしていた紙袋の中身を広げた。プラカップに入っているホットコーヒーとツナサンドが、それぞれふたつずつ。
「え、差し入れしに来てくれたの？」
思わずワントーン高い声が出た。久瀬くんがおかしそうに笑って「そう」と答える。
「ありがとう、やっぱり持つべきものはデキる同期だね」
単純にお腹が空いていたのもあるけれど、彼の気遣いがうれしかった。
「俺もずっと外回りだったから、一緒に食べさせてもらうわ」
「うん、食べよ食べよ」
そのまま直帰することもできたのに、私が残っていると予想して軽食を調達してくれたのか。なんだか、申し訳なかった。
そんなことを考えながら、私の分を受け取った。まずは、コーヒーをひと口飲む。
おいしい。中身はカフェモカだ。コーヒーは甘ければ甘いほどいい。私の好物を把握しているなんて、長い付き合いだけある。

疲れた頭に糖分を染み渡らせたところで、サンドイッチに持ち替えてぱくつく。
……あぁ、ホッとする。ずっと気持ちが張りつめていたから、いい気分転換になった。
「……さっき、お客さんから聞かれたって言ったじゃない。やっぱりＳＮＳだとすぐ広まっちゃうんだね」
直前の言葉を思い出してつぶやくと、彼がコーヒーを啜りながら相槌を打つ。
「みんな、なにかのついでにスマホは見てるだろうしな」
「そのうち説明文が回ると思うけど、今回の件は食い違いっていうか、それぞれが適正に仕事をしていただけで、決して悪意はなかったんだよね。とはいえ、客観的に見てマキシムが東和に不満を感じるのも仕方がないかな、と思う内容ではある」
「うん」
「法務の確認のあと、ちゃんと声明を出すんだろうけど……早く沈静化してもらわないと、『ＬＵＸＥ』はもちろんほかの製品の売り上げにも影響が出そうで怖いよ」
おそらく今も別室で精査中なのだろうけれど、もし度重なる修正依頼が契約の範疇を超えていたのであれば、マキシムに謝罪をしたうえで追加費用の支払いを行い、和解をする必要がある。東和も『下請けいじめ』を黙認している会社だというイメージが広まるのだけは避けたいはず。
ましてや、『ＬＵＸＥ』ラインのキャンペーン開始直後だ。今はこういったＳＮＳ発の炎上が不買に結び付くケースも少なくないから、スピーディーに解決できたらいいのだけど。
「あのアカウントの投稿は午前中の一件だけ？」

「って聞いてる。それからなにも発言してないみたい」
ＳＮＳの動きを見ていた同僚がそう口にしていた。「もしかしたら、思ったよりも大ごとになってしまって、投稿者本人もおどろいているのでは？」とも。
念のために、社用スマホを手に取り件（くだん）の投稿者のアカウントを確認してみる。やはり、例の告発以降、新しい投稿は見当たらない。
「じゃあ、これ以上燃料が撒かれることはないのかもな」
「そうだね……」
――というか、そうであってほしい。
私は不安と一緒にカフェモカを喉奥に流し込んだ。

そんな祈りとは裏腹に、事態はさらに悪化の一途を辿ることとなる。
深夜から明朝にかけては、ＳＮＳが活発になる時間帯だ。そのころから『ＬＵＸＥ』ラインキャンペーンに対して疑念を抱く投稿が、ぽつぽつと増え始めた。
ひとつは、当落通知画面の不備の指摘。専用サイトにレシートに記載されたシリアルナンバーを登録後、画面には落選と表示されたはずなのに、ポップアップでは当選と出た――そんな報告が複数上がっているという。もし事実なら、致命的なミスだ。早急に修正しなければならない。
もうひとつは、当選操作を疑う声だ。フォロワー数の多いインフルエンサーの上位賞当選報告が目立つせいで、東和が当選者を選んでいるのではないか、と。

システム上、こちらが誰かを優先して当選させるようなことはできない。しかし疑念が広がっていくのに理屈は関係ない。そう見えるだけでも火は簡単に大きくなる。
自宅でＳＮＳを追っているうちに、不安が募って眠れなくなってしまった。『下請けいじめ』の告発があった直後では、あまりに心証が悪い。
寝不足で出社すると、案の定、また緊急でミーティングの場が持たれた。
昨日と同じ大会議室。けれど空気はさらに重く感じられる。前方のモニターには、例の告発投稿に加えて、当落表示の不具合報告をまとめた一覧や、当選操作を疑う投稿のスクリーンショットが並んでいる。
ずらりと並ぶ長机。その一端に腰を下ろすと、集められている顔ぶれが昨日より多いことに気づいた。広報部からは河原木部長と杉田課長。販売促進部からは『ＬＵＸＥ』ラインキャンペーンの主管担当が来ていて、管理部からは支払い査定を担当する課長代理が同席している。法務部の担当者も呼ばれていた。対外的になにを言えるか、どこまで言うべきかを線引きするためだ。
さらに――
「お疲れ、堂島」
営業企画部の久瀬くんもいた。となりに座る彼に、「どうしたの？」と短く訊ねると、声を潜めて口を開く。
彼が呼ばれたのは、現場対応のためのようだ。すでに量販店の本部や取引先から「店頭で問い合わせが出ている」とか、「説明文を用意してほしい」と連絡が入っているらしい。広報の言葉だけ

を整えても、現場が動かなければ火は消えない。
「週末、博多でイベントあるだろ。あそこで騒ぎが起きたら現場が持たないからさ……」
「……そうだった。もうすぐだもんね」
胸の内側に冷たいものが落ちていく。
『ＬＵＸＥ』の目玉施策として、博多の体験イベントについてはかなり前から予定が組まれていた。広報である私は当日の対外対応や、地元メディア向けの案内文の整備でかかわる予定になっている。久瀬くんもまた、量販店本部や現場との窓口として同行し、数字と売場の声を拾う役割を担うことになっていた。
画面のなかだけでの炎上ならまだマシだ。けれど現場が燃えたら収拾はつかない。ネットや店頭だけじゃない。週末の博多が、次の火種になりかねないのだ。
そんなことを話しているうちに、河原木部長の号令でミーティングが始まる。
「弁護士先生がいらっしゃるまで、現状の確認を行います」
部長の言葉に「弁護士？」と引っかかったものの、周囲は誰も口を挟まず、部長も説明を加えないままミーティングは進んでいく。
まずは販売促進部からの報告。キャンペーンページの当落通知の不具合の原因が特定できていないとのことだった。今日はこの場にいない情報システム部もログの確認に入ったものの、再現条件は揃っていない。つまり、なにが起きているのかはまだつかみ切れていない。
このままでは、ユーザーが怒るのも当然だし、ＳＮＳが荒れるのも止めようがない。

ただ厄介なのは、炎上が画面越しでは終わらないことだった。店頭やコールセンターに問い合わせる人が増え、量販店本部も、現場掲示に回せる公式文面を求めている。いま必要なのは、対外文言と運用を短時間で一本化することなのだ。
東和には顧問弁護士がいるけれど、今回は消費者対応と契約問題が同時発生し、現場運営まで絡む。顧問側からも「危機管理に強い弁護士を別で頼んではどうか」との提案があったと、部長が言った。通常案件の枠を超える可能性があるとして慎重になったらしい。
そこで役員ルートから、企業法務と危機管理に実績がある弁護士をスポットで招く方針が固まった。さっそくこのミーティングにも同席してもらうのだという。ミーティング冒頭の部長の発言はそういう意味だったわけだ。
専門的な弁護士が入ると知って私は心底ホッとした。大事になってきたがゆえに、自分たちだけの力で解決しようとするのは無理があると、薄々感じていたからだ。発生した問題については、それを熟知している専門家に教えを乞うのがいちばんだ。
ほどなくして、大会議室の扉をノックする音が聞こえた。
「どうぞ、お入りください」
「失礼いたします」
扉一枚を隔てて聞こえた声に、私の心臓が跳ねる。
――この声。とても聞き覚えのある声は、もしかして。
扉が開くと、予感は確信に変わった。一度は夫婦となり、添い遂げることを誓った人が、そこに

立っていたのだ。
約一年ぶりに見る彼の姿は、かつてとまったく変わっていなかった。チャコール色のスリーピーススーツとワイン色のネクタイは、私と一緒に生活しているときから愛用していたものだ。印象的な切れ長の目元や、芸能人のように整った顔立ちも男性の色香をまとっている。
「桑原法律事務所より参りました。桑原龍樹と申します」
「お忙しいところ恐れ入ります。桑原先生、こちらへどうぞ」
部長が龍樹くんを室内に促すと、彼は一礼してなかに入ってきた。
「年配のベテランを想像してたけど、ずいぶん若いイケメン先生だな」
「……」
久瀬くんがぼそりとつぶやく。おそらく私に向けて言ったのだろうけれど、返答する心の余裕がなかった。
信じられない気持ちのまま、龍樹くんに視線を向ける。ちょうど彼も私の姿を見つけたらしく、こちらに視線をくれていたけれど、すぐに視線を逸らし、最前列にいる河原木部長のとなりに腰を下ろす。
「桑原先生もいらっしゃったことですし――堂島さん」
少し寂しさを覚えていると、河原木部長が私の名前を呼んだ。
「っ、はい」
「改めて、経緯の説明をお願いします」

「しょ、承知しました」
――いけない。今は私情は忘れて、仕事に集中しないと。
私はその場に立ち上がると、昨日からの経緯と、さきほど各部署から上がった報告を再度手短に共有した。
胸がざわざわして、時折言葉が詰まったり、滑ったりするのが情けない。それでもなんとか説明を終える。
「当落の不備報告については再現条件が揃っていないとのことですが、いま何件ぐらい届いていますか？」
龍樹くんの問いに、販売促進部の担当が自身のノートＰＣの画面を確認しながら答える。件数は会議の間にもさらに増えているようだ。龍樹くんがうなずきながらまた口を開く。
「優先順位をつけるなら、当落不備対応、対外文言の統一、契約トラブル対応の順です。まず、当落の誤表示が事実なら、混乱した消費者からの問い合わせが殺到して、広報のみならずコールセンターや店舗にまで影響して、通常業務が不可能になる可能性があります」
彼の言葉は丁寧だけど淡々としていて、それがその場の緊張感をさらに高めていく。同じ調子で続ける。
「次に、問い合わせに対する返答です。現在は確認中で統一しているとのことですが、質問事項が増えています。想定問答と一次回答を、今日の午前中に一本化しましょう。私と法務でチェックいたします」

法務部の担当者が「承知しました」と声を上げる。
「最後に、契約トラブルですが」
龍樹くんは言いながら言葉を止めた。河原木部長から手渡された資料に目を留めているようだ。
「……追加請求が出ている以上、マキシム側は契約範囲外だと考えています。一方で東和側は契約範囲内として査定している。ここは感情論にせず、事実を棚卸しして争点を整理しましょう。修正依頼の回数と内容、指示元、時系列などの情報を可能な限り細かく揃える。交渉に入るのはそのあとです」
河原木部長が「承知しました」と答え、周囲に視線を投げながら続ける。
「では、販売促進部は当落不備の再現条件の洗い出しと、暫定対応案の検討。情報システム部にはログの要点を至急出してもらうようにします。管理部は査定の根拠条項とマキシムへの回答メール、追加請求書の原本を整理して共有してください。広報部と法務部は桑原先生とともに、一次回答と想定問答の文言を今日の午前中に固めてください」
部長の視線が、最後に私個人へと向けられる。
「堂島さん、広報窓口として問い合わせの整理と、想定問答の叩き台の更新をお願いします。外に出す言葉は改めて統一します。現場へ回す文面も必要ですね」
「承知しました」
私が答えた直後、久瀬くんが控えめに手を挙げる。
「営業企画から補足です。すでに量販店の本部と、主要な取引先から問い合わせが来ています。店頭でお客様に聞かれて困っているそうで、説明文が今日中に欲しいと言われました。週末には博多のイベントもありますし……」
彼の言葉に、販売促進部の担当も唇を結んで短く視線を落とした。博多の会場側にも、すでに問い合わせが入っていて、今日中に運用を固めなければ、当日の導線が持たない、と。
要望を述べるふたりに、龍樹くんが短くうなずく。
「店頭向けの文面は、広報の一次回答とは別に用意したほうがいいですね。余計な情報は削って、対応方針だけを明確にし、必要なら問い合わせ先を一つにまとめたほうがいいでしょう」
龍樹くんが「どうしますか？」と問いかけるように、河原木部長へと視線を投げる。部長は思考を巡らせるように軽く額を押さえながら、久瀬くんを向いて口を開く。
「では店頭向けの短文も作りましょう。堂島さん、久瀬さんと連携して、今日の午前中にドラフトを出してください。桑原先生、文言チェックをお願いできますか」
「承知しました」
私は戸惑いつつ、もう一度うなずいた。
それから次の共有日時を決めて、ミーティングはいったん解散となった。各部署が席を立つのを横目に、河原木部長と言葉を交わしている龍樹くんを見つめる。
――よりにもよって、外部から投入された弁護士が彼とは。
私が彼と婚姻関係にあったことを知る人は少ない。だから、私がこんな風に複雑な感情を抱いていることを知る人だって、この場にはいないのが救いだ。

「どうかしたのか、堂島？」
「えっ」
「心ここにあらずって感じ」
はっととなりを向くと、久瀬くんが心配そうにこちらを見つめていた。
「え、あ……ううん、そんなことないよ。大丈夫」
「ならいいけど。それより、忙しいところ悪いな。店頭向けの説明文のドラフト作成に付き合わせることになって」
「ううん。仕事だから、全然平気だよ」
自分の発言のせいで私の仕事が増えてしまったと感じているのだろうか。そんなこと、気にする必要はないのに。
首を横に振って笑ってみせると、久瀬くんがちらりと前方に視線を送った。
「あの外部弁護士、桑原先生だっけ。頼りになりそうでよかったよな」
「うん」
「俺たちとそこまで歳も変わらないだろうに、あの落ち着きっぷり。こういう場に呼ばれるってことは、危機管理のスペシャリストなんだろう」
「そうだろうね」
私は敢えて曖昧に相槌を打った。
一緒にいるとき、お互いの仕事についてあまり細かい話はしなかったけれど、彼が優秀な弁護士

なのはなんとなく知っていた。休みの日に急遽呼び出されたり、電話口で「どうしてもこの件は桑原先生で」と熱心に頼み込まれている様子だったり。だからこそ、この場で彼の姿を見つけて、おどろきつつも納得はできた。
それからすぐ、河原木部長との口頭での打ち合わせが済んだらしい龍樹くんが、私たちのほうへとやってきて、長机の前で足を止めた。
「堂島さん、それに久瀬さんですね」
素早く腰を上げた久瀬くんにつられて、私もその場に立ち上がる。
「――改めまして、桑原です。どうぞよろしくお願いいたします」
「こちらこそ、お力添えをよろしくお願いいたします」
頭を下げる龍樹くんに、久瀬くんも深々と頭を下げる。
初対面の人間に対する折り目正しい挨拶。私と彼の関係はすでに終わっているのだから、彼のスタンスに合わせるのがベストなのはわかっている。でも、同時に他人同士に戻ったことを強調された気がして、寂しさも感じてしまう。
「ほら、堂島も」
「……あっ、よろしくお願いします」
感傷に浸っていたら妙な間が開いてしまった。久瀬くんに肘で突かれて、慌てて頭を下げた。
「さっそくドラフト作成に入っていきたいのですが、このままこの部屋を利用してもよろしいですか？」

龍樹くんは表情ひとつ変えずに私たちを見比べたあと、人差し指を下に向けながら訊ねる。
「いいよな、堂島」
「は、はい。しばらく押さえてあるので、問題ありません」
久瀬くんに振られて、やや力みながら答える。
――大丈夫、落ち着いて。目の前にいる龍樹くんは、元夫としてじゃない。会社の窮地を救ってくれる外部弁護士としてここにいるんだ。意識する必要なんてない。
私は自分にそう言い聞かせたあと、深呼吸をして、揺らぎそうだった気持ちをオンモードに切り替えた。

店頭向けの説明文作成そのものはスムーズに進んだ。久瀬くんが現場で聞かれそうな質問を挙げ、私が回答を作成。それに対して龍樹くんに赤字を入れてもらい、危ない表現を削っていく。その繰り返し。
できあがったドラフトを杉田課長経由で河原木部長に送ると、すぐ返信が来た。内容としては、『今日の文面はこれでOK。ただし状況は毎日変わるため、明日からオンラインでも構わないので毎朝時間を取り、進捗確認の機会を設けてほしい。参加は私と久瀬くん、そして龍樹くん。必要な部署はその都度呼び込むこと』。
気まずいけれど、部長直々の指示となれば拒否もできない。その短い時間だけは龍樹くんが夫であったことを忘れて、目の前の問題解決に集中するしかない。

翌朝からさっそく、三人での定例ミーティングが始まった。
出勤してすぐ、小会議室へ直行する。定刻は九時となっているけれど、助っ人である龍樹くんよりあとに到着するわけにはいかないと、十五分前には小会議室へ入った。
すると、私と同じ考え方をしたらしい久瀬くんが、すでにスタンバイしていた。軽く挨拶を交わしたあと、それぞれ席につく。小会議室は丸テーブルを椅子が囲むスタイルで、私と久瀬くんは椅子をひとつ挟んだ位置に腰を下ろした。
「なぁ、訊いてもいいか？」
「なに？」
「桑原先生と知り合いだったりする？」
ちょうど、通勤途中に買ったカフェモカを飲んでいたところなので、噴き出しそうになった。ぐっと堪えて苦笑を浮かべてみせる。
「な、なんで」
「自覚ないの？　桑原先生の前だとなんか、ソワソワしてるから。元旦那の同業者だし、顔見知りなのかな、とか」
「違うよ。全然」
ちょっと呆れたような顔をしているのは、それだけわかりやすかったということか。私は首を横に振った。
「顔見知りどころか元旦那本人だ」とは言いづらかった。結婚直後に桑原姓に変わったと伝えた記

憶があるので、久瀬くんだけには白状してもよかったのかもしれない。けれど、彼は忘れているみたいだし、そもそも昨日の段階で打ち明けておくべきで、タイミングを逃してしまった感がある。

「ふーん」

しばらくジト目で私を見つめていた久瀬くんだけど、ふうっと小さく息を吐いた。

「――じゃあやっぱ、あの人が男前だからか。そのうえ、敏腕弁護士って肩書きがつくわけだから、そりゃ意識もするよな」

どうやら久瀬くんは、私が龍樹くんに一目惚れでもしたと思っているらしい。

そうじゃない。けど――見とれてしまったのは事実だ。

カチッとしたスリーピースのスーツを着て、大勢の前で冷静に理路整然と話す彼の姿は、堂々としていてカッコよかった。

龍樹くんは男性的な魅力溢れる、素敵な人だ。あんな人と一瞬でも夫婦であったのは奇跡に違いない。奇跡とは、常識では到底起こりえないこと。だからこそ、終わりのときを迎えるのも早かったのだ。

胸がずきんと痛む。もう離婚については割り切れたつもりだったのに、昨日、龍樹くんを目の前にしたときに動揺してしまった。やはり私は、まだ彼のことを完全に他人だと思えていないのかもしれない。

だとしても平気。落ち込む必要はない。そう自分に言い聞かせる。

今後かかわらないと思っていた人物、それも自分を裏切った元夫がいきなり目の前に現れたなら、誰だって平静ではいられなくなるはずだ。

もう別れて一年。されど一年。消化しきれていない思いがあったとしても、むしろ、この件を通して、彼が他人になったことを実感していけばいい。

「変なこと言ってないで。もうすぐ先生、いらっしゃるでしょ」

「はいはい」

私が笑い飛ばして話題を終わらせると、彼が両手で後頭部を支えながら、軽く天井を仰ぐ。

「……はぁ、昨日の夜から問い合わせとクレームがてんこ盛りだよ。気が重い」

「それを聞いて私も気が重いよ」

久瀬くんのつぶやきを聞いたせいで、疲れが伝染してきた。げんなりして言う。

今は広報としてやるべきことをやる。それだけを考えよう。

そろそろ龍樹くんもやってくる。私は一度だけ深く息を吸い、ノートＰＣを開いた。

立ち読みサンプルはここまで

第二章　再会

八時五十五分。定刻の五分前に龍樹くんがやってきて、ミーティングが始まった。

彼は軽く挨拶を済ませたあと、「おふたりもお忙しいと思いますので、十五分で終わらせます」と宣言して、一項目ずつ進捗を確認していく。

まずは当落表示の不備の件数について。私は社用スマホのメモを見ながら、夜の間に増えた報告件数と、現時点で分かっているパターンを改めてふたりに伝えた。再現条件はまだ揃っておらず、引き続き情報システム部が確認しているところだ。

龍樹くんは、原因が分かるまで暫定案内で混乱を止めるべきとの助言をくれた。具体的には『当落結果は所定の確認画面でご確認ください』という注意書きを、キャンペーンサイトの目立つ場所に掲示するのがいい、と。

次に、店頭と取引先の反応について。ここは久瀬くんの領域だ。先ほども軽く聞いたけれど、問い合わせは増えており、今朝も本部から『説明文とその問い合わせ先を一本化してほしい』と催促が入っているとのこと。この件に関して、龍樹くんは午前中までに店頭向け説明文の改訂版を出すことと、この件に関する問い合わせ窓口を限定するべきと述べた。

そして、いわゆる『下請けいじめ』に関する問い合わせについて。当落表示不備と当選操作疑惑の影響で件数が増加している。対外的には契約の詳細に踏み込まず、事実関係の確認と適正取引の姿勢だけを伝えるべきだと言った。

マキシムの窓口になっているのは販売促進部だ。昨夜に連絡を入れ、追加請求の内訳資料の提出を依頼し、先方の回答待ちと聞いている。その間、こちら側も契約条項と査定根拠を整理中とのこと。まだなにも言えることはない状況だ。

昨日と同様、龍樹くんの態度はそっけなかった。話題は業務に関することのみ。久瀬くんが振った当たり障りのない世間話に応じるくらいで、私とふたりでの会話はいっさいなし、というのは、やはりちょっと傷つく。……まぁ、彼からしてみれば、自分の心変わりで別れた元妻との仕事はとてもやりづらいだろうから、気まずく思うのも仕方がないか。

冒頭で示された通り、三人でのミーティングは十五分きっかりで終わった。このあとは十時から全体ミーティングだ。その場は一度解散し、自分のデスクに戻った。

次から次へと仕事が増える。龍樹くんの提案をメールで課長、部長に共有しつつ、説明文を修正する。ついでに、問い合わせの一次回答テンプレと想定問答を更新し、コールセンターと営業現場へ展開するべく久瀬くんにつないだ。夜の間に増えた投稿と記事のリンクを時系列で控え、法務に共有することも忘れない。

忙しいのは逆にありがたい。十時からのミーティングには龍樹くんも参加する予定だけれど、彼のことを考えなくて済む。